

表現活動を通して育まれる資質・能力

—音楽表現活動に視点をあてて—

Enhancement of Qualities and Abilities through Expression Activities —Focusing on Music Expression Activities—

中村 礼香

Ayaka Nakamura

鹿児島女子短期大学

平成30年度より施行される新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示され、その中で幼児教育において育みたい資質・能力が定義された。本稿では、音楽表現活動を通してどのような力を育てていくことができるのかを要領に沿って分析した。その結果音楽表現活動によって育まれる力は音楽能力だけではないことが明確となった。この結果を元に今後幼児の能力をより伸ばすための表現活動を考案していきたい。また、今回は音楽表現活動についてのみ分析を行ったが、今後は「表現」として造形表現や身体表現の分野と共に大きな表現活動として捉え、これらの資質・能力を育むためにどのような表現活動を行うことができるのか考察する予定である。

キーワード：幼稚園教育要領、領域「表現」、音楽表現活動、リトミック、資質・能力

1. はじめに

平成29年に『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』がともに改訂され、平成30年4月より施行される。今回の改訂では、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園は幼児教育施設として位置づけられ、「幼児教育において育みたい資質・能力」として三つの柱が定義づけられた。また、5領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通して幼稚園であれば3年、保育所や認定こども園であれば5年間の中で幼児教育が最終的に向かっていくであろう方向として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目が示された。

筆者は保育者養成校において「保育内容（表現）」の中の音楽の授業を担当している。本研究では今回の改訂された『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に添って、音楽活動、特に筆者の専門であるリトミックを中心に幼児にどのような資質や能力を育むことができるのかを改めて検討する。

2. 領域「表現」と音楽表現活動

今回告示された領域「表現」の内容について詳しく見てみると、いくつかこれまでとの変更点が見られる。その一つは、「内容の取り扱い」において、(1)に「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」、(3)に「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」という文言が付

け加えられたことである。音楽に特化して考えると、器楽合奏や歌唱活動などの表現活動をする以前に、生活する中で身近な自然や素材を意識的に保育に取り入れ、それらの音を良く聴いたり、その音を再現したり、その音を身体で表現したりすることで感性を高めていくことが求められている。また様々な表現の方法を数多く体験させた上で子どもたちの表現力を伸ばしていくことが求められていると考えられる。角田(1978)によると、日本人は虫の声を左脳で言語として聴き、ヨーロッパ人は右脳で雑音として聴くという結果が得られた。日本人は虫の種類によって異なる声として聞こえ、それを楽しむ風習があるが、ヨーロッパ人には全て一緒に聞こえ虫の声に意識を向けることがないのである。このように日本人だからこそできる自然の音を楽しむ経験を幼児にたくさんさせたいものである。

また、『保育所保育指針』と『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においては、満3歳以上児用とは別に、満1歳以上満3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容が明記された。満3歳未満児に対する教育を充実させることがねらいである。

保育現場における音楽活動は、わらべうた遊び、歌唱活動、音遊び、楽器遊び、リズム遊び、リトミック、器楽合奏、マーチング、和太鼓、手遊び・指遊びなど多岐に渡る。しかし、幼稚園教育要領解説(2008)の領域「表現」の内容「(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」の解説の中に、「大

切なことは、正しい音程で歌うことや楽器を上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである¹⁾と記載されていることから、本論文における音楽活動とは、例えば発表会や音楽会において上手に演奏するために歌や合奏や和太鼓、マーチングなどの練習を一生懸命することではなく、幼児が音楽を通して自由に表現活動を行うこと前提とする。その表現活動の一つとして、例えば自然の音に耳を澄ませ、オノマトペにより言葉で表現した後で、それを身近な素材を使って音を再現するという活動を行うことができる。音そのものを楽しむ遊びである。また、音楽を楽しむ表現活動として、筆者はわらべうた遊びやリトミックを子どもたちと行うことが多い。特にリトミックを保育現場で行う意義について領域「表現」の内容と照らし合わせながら見ていきたい。

リトミックの創始者である、エミール・ジャック＝ダルクローズ (Emile・Jaques=Dalcroze: 1865~1950) は、「全てわたしたちの実践は、心理的集中力を増大させ、身体的調和をきちんと組織し、人格を高めるという崇高な目的を持っている²⁾」と述べている。つまり、リトミックにより心と身体の調和を目指して神経組織や筋肉組織をトレーニングすることで、音楽を聴いてその音について心で感じたことを感じたままに身体で表現できるように、自分の肉体を自分のコントロール下に置くことができるようにすることを目指しているのである。そして、ダルクローズはリトミックによる「想像力の訓練、感受性（その形態の一つが音楽性であるが）の教育、個性の喚起（独特なヴィジョン、ユーモアや皮肉、エキセントリックな事物や存在を締め出しはしない）は、創造へと連なる道にうちたてられる道標となるものである。」³⁾と述べている。リトミックを通して、想像力や感性を高め、創造力を養うと述べているのである。これは、領域「表現」の「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と一致すると捉えることができる。また内容の「(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」にも当てはまる。さらに、表現の内容の取り扱いにみられる「感動の共有」「教師による表現の受容や意欲の受けとめ」「自己表現を楽しむ」などは、神原(1992)が、「リトミックで行われる集団活動を通して、他者の表現の受容し、同時にオリジナルな自己表出を遂行するのであるが、その過程で得られる人間関係の理解（他者理解、共感体験など）は、人間教育としての機能を十分に果たしていると考えられる。」⁴⁾と述べているように、幼稚園教育要領に示されたものとリトミックによる教育が目指すものに共通点があることが認められる。

一方、『保育所保育指針』と『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』において満1歳以上満3歳未満児の保育に関わる狙い及び内容が制定された。領域「表現」の内容の「②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」とあるが、これにもリトミックも当てはまると考えられる。

無論、リトミック以外の音楽活動も保育現場ではたくさん行われるべきである。例えば歌唱活動は、幼児の語彙力を増やし、美しい日本語を伝えることができ、歌を歌うことで風景や動物、ストーリーなどをイメージしやすくすることができる。器楽合奏では、友だちと一つの音楽を作り上げる楽しさを味わうことができ、人と合わせるといった協調性を養うことができる。生演奏やCDなどで鑑賞活動を行い、音楽を楽しみ、感想を言い合うことで友だちの感じ方に共感したり、様々な表現方法があることを知ったりすることができる。前述したように聞こえた音を身近な物を使って再現する表現活動を行うことで、何かに耳を傾けるという集中力を養い、その音に対するイメージをオノマトペで表現することで言葉における表現力を養い、それを元に新しい表現を創造する力をつけることができる。わらべうた遊びでは、日本独自の旋律を知ることができ、友だちと触れ合い、協調性や社会性を養うことができ、歌によっては運動能力を高めたり、数字に触れたりすることもできる。

保育者はたくさんの音楽表現活動があることを知った上で、バランス良く取り入れ、幼児の音楽性を伸ばし、表現力を高めていくことが大切である。そして普段から行っていることをそのまま発表会で活かすことができればそれに越したことはない。日常の保育の中でリズム感を養い、様々な楽器を子どもたちに体験させ、誰でもどの楽器でも叩けるように音環境を整えておき、どの子がどの楽器に特に興味があるかを保育の中で知り、発表会に繋げていくことができれば発表会のために一生懸命練習をさせる必要がない。筆者は、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』がこのようなことを求めていると考えている。

3. 幼児教育において育みたい資質・能力の三つの柱と音楽表現活動

幼児教育において育みたい三つの柱として、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性」が定義づけられた。音楽活動を通してどのようにこれらのことを身に付けていくのかのかを見ていくこととする。

「知識及び技能の基礎」とは、「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったり

する」ことである。リトミックでは、音の高低、強弱、フレーズ、リズム、拍子、拍、テンポ、音価、ニュアンス、アーティキュレーションなど、音楽の要素を感じたままに身体全体で即興的に表現することで音楽を理解していく活動である。例えば、「風」を指導者がピアノで即興的に表現する場合、台風のような強風やそよ風のような優しい風など多様な風をイメージしながら強弱や高さを変えて表現する。子どもたちはその音から感じたままに身体で表現するのであるが、台風のようなイメージで指導者が弾いているときは全身で大きな動きをする、そよ風の時は指先だけの動きをしたりするなど、音の強弱の違いを感じて表現を行う。このような強弱を感じる様々な活動を通して、大きな音を表現するときと小さな音を表現するときの力の入れ方が異なることに気付く。これに気付くと、打楽器を叩くときにフォルテやピアノの表現をする際の力加減を意識的に行うことができるようになる。このように、身体表現を通して筋肉の使い方を知り、その上で楽器の叩き方を教えることで、音楽的な叩き方ができるようになるのである。リトミックは音楽を「聴く」ことが大切である。音楽を良く聴き、音楽の変化に即時反応することで、強弱や高低、など様々な音楽的要素感じたり、演奏される音楽によって感じ方が全く異なることなどに気付いたりすることができる。一つ一つの活動ができると達成感を味わうことができる。リトミックを通して音楽の基礎的な知識を獲得し、音楽表現技術の基礎を培うことができるのである。

二つ目の柱である「思考力、判断力、表現力等の基礎」とは、「気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」ことである。リトミックでは、例えばピアノが演奏されている間は歩く、ピアノが止まったら動きを止める、ある合図が聞こえたら指定された動作をする、音が変わったらそれにあった動作に変えるなどの音の変化に素早く反応することが求められる「即時反応」を中心として活動が進んでいく。高い音が聞こえたらジャンプ、低い音が聞こえたら座る、グリッサンドが聞こえたら方向転換をするという活動を行う場合、どの合図がどの動きなのかを記憶し、その合図が聞こえたらすぐにその動作を行う。すなわちピアノの音を常に集中した状態で聴いておくことが必要であり、合図に対する動きを自分の頭で判断し、身体で表現することが求められるのである。また、身の回りや自然の音を何かを用いて再現活動を行う場合、音をイメージし、それをどのようにしたら表現することができるか思考し、様々な物で試し、工夫し、実際に表現するという過程を通る。このようにリトミックを含め表現活動を行うことで、思考力、判断力、表現力を身に付けていくことができると考えられる。

三つめの柱である「学びに向かう力、人間性」は「心情、意欲、態度が育つ中で、より良い生活を営もうとする」ことである。ベネッセ教育総合研究所(2016)の研究では、学びに向かう力を「子どもの育ちとして『好奇心』『協調性』『自己主張』『がんばる力』」と設定し、「生涯にわたり、社会生活を営むうえで基盤となる力」⁵⁾と述べている。リトミックを通して育つ力は、音楽的な能力だけではない。まず前述したように集中力である。音の変化にすぐ対応できるように常に集中することが求められている。また、指導者から指示された合図を記憶したり、指導者が叩いたりリズムを記憶してそれを真似して叩いたりという短期記憶力が必要な活動をすることも多く、記憶力が養われる。そして、友人達と協力して行うため、コミュニケーション能力、協調性、思いやりの心などが身につく。また、他人の表現を見ながら、他人がどのように感じているのかを視覚的に捉えることができ、共感したり、他人の表現を認めたりといった他者理解を行うことができる。また、わらべうた遊びは二人以上で行うため、コミュニケーション能力を高め、ルールを守って遊ぶ力などが身につく。このような力を身に付けていくことで、人間性を高め、より良い生活を営もうとする意欲に繋がるのではないかと考えている。

4. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と音楽表現活動

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり、生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10項目が挙げられた。音楽活動を通してどのようなことが育っていくかを考えていく。

《健康な心と体》マーセル(1967)は、「人間が安定した感情を持ち、幸福な生活ができるようになるには、子どものときから知的経験に匹敵するだけの感情経験の機会を与えることが大切であり、感情経験の機会を、最も多く提供するものが音楽である」と主張した⁶⁾。健康な心という定義の中の一つには安定した感情を持つことだと考えられる。音楽活動を行うことにより心を健康にし、また指遊びなどで手先を動かすことで脳を活性化させ、わらべうたやリトミックなどで全身を使って遊ぶことで運動機能を高め、健康的な体作りにも貢献できると考えている。

《自立心》リトミックでは自分で考え、自分で判断し、行動に移すことが求められる。この活動を通して判断力が養われ、自分の力で行うために考えたり、工夫したりして活動しながら達成感を得ることができ、自立心を高めていくことに繋げることができると考えられる。

《協同性》合奏やわらべうた遊び、リトミックなど友だちと協力して行う活動を通して協調性やコミュニケーション能力、思いやりの心などお互いのことを考える力が身に付けることに繋げることができると考えられる。

《道徳性・規範意識》わらべうた遊びにはそれぞれ遊び方があり、それを子どもたちが工夫して発展させてきた。リトミックをするためにも最低限のルールを理解した上で自由に表現することが求められる。楽器遊びなどを行うにしても、勝手に全員がそれぞれ叩くわけではなく、条件の中で演奏する必要がある。何度も繰り返すうちに、ルールを守る必要性を理解し、自分の動きをコントロールすることができるようになり、道徳性・規範意識を高めることに繋げることができると考えられる。

《社会生活との関わり》近年、地域のお祭りや施設などで園児が踊りや歌、合奏や和太鼓など披露する機会を持つ園が増えていて、自分たちが演じることで地域の人を笑顔にすることができることを実感し、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみを持つようになると考えられる。

《思考力の芽生え》音楽表現活動を行うと、一人ひとりが違う動きをしている。活動を通して自分と異なる考え方があることに気づき、それを真似したり、新しい動きを考えたり、より良い表現にしようとする。自分で考えて工夫しようとする力を付けることができると考えられる。

《自然との関わり・生命尊重》自然の音に耳を澄ませ、その音を身近な素材を使って再現したり、自然の変化や動植物を身体表現したりすることで、身近な事象への関心を高めることができると考えられる。

《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》音符の長さや拍子など音楽はすべて数に関係している。音符の名前を教える前に、リトミックでは拍数や拍子などの数を意識させて行う活動がある。耳で音の数を聞いてその数のグループを作ったり、拍子の変化を聞き取ったりする。また、指遊びでは、5本指から1本指まで減らして行ったり、1本ずつ指を増やし行くことで指がいろいろなものに変身したりと数を使った遊びも多い。ゲーチャキパーを用いて行う手遊びでは、形を重ね合わせることで何ができるかイメージし、図形への興味を惹くことができる。そしてわらべうたでも数を用いた歌も多く、数の認識を高めるための遊びがある。これらの活動を通じて数量や図形に親しみきっかけを作ることができると考えられる。

《言葉による伝え合い》歌唱活動によって豊かな言葉や表現を身に付けたり、音楽活動を行う中で言葉のやりとりを行ったり、考えたことを言葉で伝えたりすることで、言葉で自分の気持ちを伝えるきっかけを作ることができる。また、わらべうたでは歌詞の中で問答が行われることが多々あり、言葉によるコミュニケーション力を

高めることもできる。

《豊かな感性と表現》これに関しては本論で述べてきたように、様々な音楽活動を通して豊かな感性と表現力を養っていくことができると言える。

以上見てきたように、音楽活動を通して様々な資質や能力を育むことができると考えられる。

5. 総括

新しい『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、幼児にどのような力を育みたいのかということについて具体的に提示された。無論、領域「表現」であるので、音楽活動だけで考えることはできない。造形表現や身体表現と音楽表現を融合させて、大きな表現活動として捉えていくことが必要である。ただ筆者の専門が音楽のため、今回は音楽の視点から新しい教育要領を見た場合どのように子どもたちに力を育んでいくことができるのかを分析した。分析する上で特に筆者の専門であるリトミックを行うことを前提に論じてきたが、音楽活動を行うことの意義は音楽的な能力を育むだけではないことが改めて分かった。この分析結果を基に、学生達には授業を通して保育現場における音楽活動の意義を伝え、どのような音楽活動を行えばいいのかを具体的に伝えていきたい。

今後は前述したように、音楽的視点からだけではなく、音美体を大きく捉えた表現活動においてどのような資質・能力を育むことができるのかをそれぞれの教員と共に分析をしたいと考えている。その分析を元に、子どもたちの資質・能力をより良く伸ばすためにどのような活動を行っていくべきか、より具体的に検討を行いたい。

引用文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館、2008、p.165
- 2) フランク・マルタン他著、板野平訳「作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ」全音楽譜出版社、1977、p.388
- 3) フランク・マルタン他著、板野平訳「作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ」全音楽譜出版社、1977、p.393
- 4) 神原雅之「幼児のリトミック教育に関する一考察」広島文教女子大学紀要、(27)、1992、p.54
- 5) ベネッセ教育総合研究所「園での経験と幼児の成長に関する調査」2016、p.2
- 6) ジェームス・L・マーセル著、美田節子訳「音楽教育と人間形成」音楽之友社、1967、p.39

参考文献

- 角田忠信「日本人の脳一脳の働きと東西の文化」大修館書店、1978

- エミール・ジャック＝ダルクローズ, 板野平訳「リトミック・芸術と教育」全音楽譜出版社, 1986
- エミール・ジャック＝ダルクローズ, 板野平監修, 山本昌男訳「リズムと音楽と教育」全音楽譜出版社, 2003
- 岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行監修, 榎沢良彦他編著「保育内容・表現」同文書院, 2006
- 木村はるみ・蔵田友子「うたおうあそぼうわらべうた 乳児・幼児・学童との関わり方」雲母書房, 2009
- 田村里喜編著「表現の指導法」玉川大学出版部, 2014
- 文部科学省「幼稚園教育要領」2017
- 厚生労働省「保育所保育指針」2017
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2017
- 今村明美, 有村さやか他編著「子どものための音楽表現技術」萌文書林, 2017
- 無藤隆・汐見稔幸編「イラストで読む! 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領はやわかりBOOK」学陽書房, 2017

(2017年12月1日 受理)